

# 魯迅『祝福』と江口渙『峡谷の夜』

——女性と子どもを中心に——

吉田陽子

## はじめに

1923年、魯迅・周作人共訳作品『現代日本小説集』<sup>1)</sup>が出版され、その内訳は、魯迅が11篇、周作人が19篇である。魯迅の翻訳は、夏目漱石作2篇、森歐外作2篇、有島武郎作2篇、菊池寛作2篇、芥川龍之介作2篇及び江口渙作1篇である。江口渙の作は『峡谷の夜』<sup>2)</sup>という作品である。

さて、魯迅が選んだ作品の作者は当時すべて注目されている人物であったが、何故江口渙の作品（『峡谷の夜』）を1作だけ翻訳したのだろうか。

江口渙をめぐるのは、大別して次のような視点から先行研究があった。

藤井省三は江口渙について、「日本社会主義同盟は、1920年12月に結成された社会主義者大同団結の組織である。結成に先立ち、8月5日に発表された趣意書および規約草案に発起人として名を連ねた…（中略）…であった。社会主義同盟には、このほか小川未明、秋田雨雀、江口渙、藤森成吉などの若い文学者も参加している。」<sup>3)</sup>と述べ、齋藤洋太郎は、「寡婦（魯迅『祝福』の主人公祥林嫂を指す——筆者）は、土地廟へのしきいの奉納が無効であることによって狂し、『峡谷の夜』のお仙は「すべての事を擲って、生まれた子供一人に命を繋いで生きようとし」て破ることによって発狂してしまったのだ。」<sup>4)</sup>と述べている。

だが、魯迅と江口渙とはどのような関わりがあったのか、また魯迅が翻訳した『峡谷の夜』に登場する阿仙という「狂人」の女と2ヶ月未満で死んだ子どもが、後に魯迅『祝福』<sup>5)</sup>に登場する祥林嫂の創作にどのような影響を与えたかに関する詳細なる研究は課題として残されている。魯迅の早期翻訳作品に関

する研究といえば、日本と中国ともロシアと日本の文芸論や文学作品及び弱小国の作品に重点を置き、『現代日本小説集』の研究はあまり重視されていないのが現状である。例えば、王友貴は、魯迅の『現代日本小説集』の翻訳作品が、他の翻訳作品と風格の相異を述べ、何人かの作家名を列挙していたが、江口渙に関しては言及していない。それは、江口渙の作品を重要視していなくても良いと思っていたからであろう<sup>6)</sup>。

しかし、筆者は、魯迅が江口渙『峡谷の夜』の翻訳を通じて、のち、『祝福』中の祥林嫂や子どもの形象創作に影響を与えたことは、『峡谷の夜』が『現代日本小説集』の翻訳作品の中でも重要な位置を示している作品であると考え

る。江口渙『峡谷の夜』は、最初『帝国文學』(1918年12月号)に掲載され、その後、最初の作品集『赤い矢帆』(1919年6月)に収められた作品である。江口は、「短編集『赤い矢帆』は芥川が口をきいてくれたので1919年6月新潮社から処女出版ができた」と述べ、芥川龍之介に認められた作品であることが分かる。江口は、1920年に設立された日本社会主義同盟に所属する若い作家ではあるが、『峡谷の夜』には大正文学の特徴である人道主義の思想が溢れている作品である。魯迅は同作品を翻訳し、1923年6月に出版される『現代日本小説集』に収め、そして、翌年の1924年3月25日に『祝福』を発表した。つまり、魯迅の『祝福』は、江口渙『峡谷の夜』の翻訳後に創作された作品である。

そこで本稿では、『祝福』と『峡谷の夜』における女性像と子ども像の比較研究を行い、江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』が、魯迅『祝福』の創作に与えた影響を考察する。

初めに、江口渙の『峡谷の夜』の主人公のモデルと思われる『児を殺す話』を取りあげ、『赤い矢帆』には収められるが、『江口渙自選作品集』第1～3巻に収められていない『峡谷の夜』と『雁』の二篇と関係づけて、この作品執筆当時の江口渙の女性観と子ども観を考察する。

次に、魯迅が江口渙『峡谷の夜』(『現代日本作品集』1923年6月出版に収録)翻訳後に書き上げた『祝福』(1924年3月)での、『峡谷の夜』に描く女性・お仙と生後2ヶ月未満の子ども、祥林嫂や彼女の幼い子ども・阿毛の人物形象を取

り出し、「狂人」となった女と子どもを失った女という類似点に焦点を当て考察を試みる。

## 一 江口渙『峡谷の夜』の成立過程

### (1) 江口渙

魯迅は、『現代日本小説集』では、江口渙について次のように紹介している。

「江口渙 (Eguchi kan) は、1887年生まれ、東京大学英文学科出身。かつて日本社会主義同盟に参加。「峡谷の夜」(Kyokoku no yoru) は『赤い矢帆』(1919)に収録されている。」

もう少し詳しく紹介すると、江口渙は、父は江口襄、母はきね、明治20年(1887)7月20日東京生れ、1975年1月18日没。佐藤春夫らと同人雑誌「星座」を創刊し、大正9年(1920)日本社会主義同盟に参加、同中央委員。日本プロレタリア作家同盟の創立に参画、のち中央委員長となる。戦後は、日本共産党中央委員、同名誉中央委員、日本民主主義文学同盟議長などとして活躍。さらに、「大正9年(1920)12月9日、「日本社会主義同盟」が結成せられ、翌年10年(1921)解散させられた。アナーキズムからマルクス主義までを含む雑多な社会主義思想を抱懐する人々の大同団結であり、小川未明、加藤一夫、秋田雨雀、藤森成吉、江口渙、小牧近江、佐々木孝丸、松村正俊、尾崎士郎、前田河広一郎、平林初之輔らの文学者を含み、全国の加盟者は三千名に及んだという。」<sup>7)</sup>「日本無産派芸術家聯盟は大正15年(1926)11月成立、秋田雨雀、小川未明、加藤一夫、江口渙、宮嶋資夫、新居格、中西伊之助、松本淳三、壺井繁治ら。」<sup>8)</sup>という記述がある。

江口渙自身は、「たまたま、大正9年(1920)7月9日に、母が栃木県鳥山町の屋敷町のこの家で死んだ。そこへ、堺利彦、山川均、山崎今朝弥というような世に知らさせる社会主義者の名前をつらねた勧誘状が送られてきた。『こんど結成される日本社会主義同盟に加盟せよ』というものである。…(中略)…その当時の私には、社会主義の理論などほとんどなかったのだ、といえる。ただ、こころの中の大きなささえとなっていたものは、情熱的に燃え上がる社会正義感だけだった。天皇制の否定と資本家や財閥への憎しみ。それだけが全部

だった。』<sup>9)</sup>と記述している。

上記で示したように、『峡谷の夜』は1918年(『三田文學』12月号)に創作された作品であり、江口渙が日本社会主義同盟に参加したのは1920年のことである。

## (2) 江口渙の作品

### (a) 『児を殺す話』

江口渙は『峡谷の夜』が発表される一年前(大正6年<1917>『帝国文學』第23巻第11号)<sup>10)</sup>に、『児を殺す話』を発表した。この作品について、江口渙は、「題材は麻生久からもらったもので、もとは東京区裁判所の法廷記録である」と明かし、「佐藤春夫がひどくほめてくれた。…(中略)…芥川も(赤ん坊がねんねこの上に乗ったまま川を流れてゆくところが面白い)」と発表した当時の反応を述べ、さらに、「とにかくこの『児を殺す話』は作家としての私の出世作となった」<sup>11)</sup>と述べた。

『児を殺す話』は江口渙のデビュー作であり、材源は実際にあった事件を基にし、芥川龍之介や佐藤春夫にも褒められた自信作であった。

『児を殺す話』のあらすじは次の通りである。

松崎とめという36歳の女性が生活難の為、嬰兒である次男を神田川の水に沈めて殺し、家に戻って、長男を背負って無理心中しようと神田川へ向かっている途中、交番の前を通りかかった時、巡査に怪しまれて捕まり、事件が発覚する。松崎とめの証言を通じて、子どもを殺す理由が説明される。松崎とめの一回目の結婚は、夫と死別し、子どもは夫の親戚に引き取られてしまう。二回目の結婚は、夫が酒に溺れ、賭博に手を染め、会社の金に手を出してしまい、雇ってくれる会社なくなる。以前、松崎とめの父親が発狂して焼身自殺をしたので、彼女は自分も気がおかしくなる前に、二人の子どもを道ずれにしようとした。作品には、「狂人」の女が描かれている。

### (b) 『峡谷の夜』

『峡谷の夜』は、1918年12月『三田文學』に掲載され、翌1919年6月江口渙

の初めての作品集『赤い矢帆』（新潮社、新進作家叢書、第17編）に収録されている。話の筋は、主人公の「私」が十数年前に、「狂人」の女を目撃したことを回想しながら、子どもに死なれて、夫にも裏切られた女性が、どうやって生きていけるのだろうかという社会への叫びを訴えている。

『峡谷的夜』のあらすじは次の通りである。

ある日の夜、中学5年生の主人公「私」が故郷に戻る途中に、気が狂った女性に出くわして、木の上から、赤ん坊の死体を投げつけられた。女性の名はお仙と言ひ、二年ほど前に、夫の山村より3里ほど離れた川下の町から嫁いで来た。夫はお仙が子どもを懐妊していても以前の女との関係を持ち続けた。その上、お仙は姑との関係もうまくいかなかった。お仙は辛い日々を辛抱して、全ての希望を生れてきた子どもに託していた。ところが、赤ん坊が栄養失調で、生れて2ヶ月で死んでしまう。その為、お仙の精神的な支えが崩れて、とうとう発狂してしまう。

江口渙『児を殺す話』（『帝国文學』第23巻第11月号、1917年11月1日）は、東京裁判所の法廷記録を材源とした作品である。『峡谷の夜』（『三田文學』1918年12月号）は『児を殺す話』を創作した一年後の作品である。『峡谷の夜』も『児を殺す話』も夫の浮気や夫の生活力の欠如のために犠牲になるという、社会的な弱者としての女性を描いているというテーマの共通性があるが、それ以外にも、筆者は以下に列挙する描写にも共通性を見出す。

#### 「狂人」の女の描写

『児を殺す話』には、「今度は茫然眼を据えて蚊帳の隅を見詰めながら頻りに右手の爪先を一本一本噛み始めました。そしてそれをいちいち丁寧に噛み切っては口を尖らしてぶつぶと蚊帳へ吹きつけました。」「すると交番の中でとめは勝吉を抱いたまま駆けつけた私たちを見て黙って笑っていました。」（傍点は原文。以下、下線はすべて筆者。）と描かれている。

一方、『峡谷の夜』には、「するといままで泣くように細く振へていたその声は、突然人間の面かも女の底気味悪い笑いに変わった。」「その嗚咽の末が又唄のように変わって行って次第に長く糸を曳いた。」「…（前略）…と思うと突然首を捻って鋭く月を見上げた。が更に唇を尖せて月に向かって続けさまに唾を

吐いた。「女は曲げた左の手で何かをしっかりと胸元へ抱えながら頻りにそれを揺す振っては、右の手で枝の一つをつかまえて、斜に伸びた幹の上に立っている。」と描かれている。

「口を尖らして」(『児を殺す話』)と「唇を尖せて」(『峡谷の夜』)と表現されるように、「狂気」する女の必死の表情に対して、「駆けつけた私たちを見て黙って笑っていました」(『児を殺す話』)と「突然人間の而かも女の底気味悪い笑いに変わった」(『峡谷の夜』)と表現されるように、あくまで他人事として突き放す世間の冷たい笑いと、どうすることもできない所に生じる絶望の笑いがあり、「尖らせる」という行為と、「笑う」という表情に、筆者は表現の共通点を見出すのである。

#### 子どものために我慢するという描写

『児を殺す話』には、「然し勝吉が生まれてからは私の考えはすっかり変わりました、どうかして勝吉を健全な幸福なものに育て上げてやりたい。自分のような不運なもの不幸なものにはしたくない。然かも勝吉を自分が見てやらなければ外に見てやる人はない。こう思うと私は俄かに生甲斐が出来て来て何事も一生懸命辛抱致す事にきめました」と描かれている。

『峡谷の夜』には、「お仙は凡ての事を擲って、生れた子ども一人に命を繋いで生きようとし始めたらしい」と描かれている。

ここに示した通り、『児を殺す話』でも、『峡谷の夜』でも、母親は自己を犠牲にしても子どものために生きようとする姿が描かれるが、それでも一方は「殺し」、一方は「死なせる」という社会状況の過酷さと凄惨を強調する作風の共通点を見出すことが出来る。

管見の限りだが、その後、江口渥は『峡谷の夜』の作品に言及したことはない。但し、『児を殺す話』に関しては次のような記述がある。

『『児を殺す話』を再読すると、この『児を殺す話』には、若々しいヒューマニズムが情熱的に押し出されていて、それが佐藤春夫につよい感動をあたえたのだと思う。ただ、その情熱が主観的にも燃え上がって出た部分と、素材をありのままに客観的にとりあつた部分とが、へんにちぐはぐになっている。そのあと一年以上たってから全面的に書きなおし題名も『ある女の犯罪』と改

めて『解放』にもう一度発表した。そのときも、いくら手を入れてもどうしても未完成なところがあって、それがひどく気になった。「だからいまよみかえして見たら、自分ながらそのまずさに相当避避するのではないかと思う。」<sup>12)</sup>という。

そして、『赤い矢帆』に収録されている「馬車屋と軍人」、「顔」に関しては、「私の社会主義思想の最初の芽がでていえるであろう。もちろん社会主義小説とかプロレタリア文学とかいえるような、それほどはっきりしたものではない。」と書かれている。

江口渙は、「若々しいヒューマニズムが情熱的に押し出されて」、「佐藤春夫に強い感動をあたえ」たが、「その情熱が主観的にも燃え上がって出た部分」と、「素材をありのままに客観的にとりあつかった部分」が「ちぐはぐになっている」と記述したように、江口渙自身が作品の未熟さを自認していたが、「そのまずしい女の生活をとおして私の若きヒューマニズムが、たといどんなに下手な出来栄にしる相当わきあふれているのではないかと思う」<sup>13)</sup>と語るのが、その時期の自身の作品に対する思いであろう。

筆者はここまで、魯迅が江口渙『峡谷の夜』の翻訳を通して、江口渙という人物を知り、彼の人道主義的な思想に共感を寄せていたことを検証してきた。

## 二 魯迅訳『峡谷的夜』と魯迅『祝福』について

### (1) 魯迅訳『峡谷的夜』

『峡谷的夜』は、1919年6月新潮社から「新進作家叢書」第17編として出版された江口渙の最初の作品集『赤い矢帆』（他5篇が含まれる）に掲載されている作品である。

魯迅・周作人共訳作品『現代日本小説集』は、1923年6月上海商務印書館により出版され、魯迅の翻訳作品は、夏目漱石、森鷗外、有島武郎、菊池寛と芥川龍之介がそれぞれ2篇、江口渙1篇、全部で11篇である。最も早い時期に翻訳された作品は、夏目漱石と森鷗外の1910年の作品であり、一番最後に選んだ作品は、1918年11月江口渙の『峡谷的夜』である。

## (2) 魯迅『祝福』

魯迅『祝福』は、上海『東方雑誌』(1924年3月25日)半月刊21巻6号に発表され、のち、『彷徨』に収録された作品である。

『祝福』のあらすじは周知の通りではあるが、次のようにまとめられよう。

魯四老爺(魯家の四番目の旦那さま)の家で働いていた寡婦の祥林嫂は、夫が死去し、姑に売られて、無理やり再婚させられた。やがて息子が生れて、やっと幸せを手に入れたと思っていたが、夫が病死し、そして最愛なる息子が狼に内臓を食べられて死んでしまう。祥林嫂は再び魯四老爺の家に戻って、働き始める。祥林嫂は自分が死んであの世に行った二人の夫が奪い合うことにより、体がのこぎりで分割されてしまう、と告げることから「私」との関係が始まる。その為、彼女は貯めていた全ての工賃を果たいて寺に敷居を寄付し、千人、万人に踏んでもらえば贖罪ができると考えていた。しかし、それでも『祝福』の祭事の日、「不浄」と見られて、魯四老爺夫人には祭事用の食器を触れさせてもらえなかった。その時から、精神が完全に崩れて、最後は乞食となり、大晦日前の『祝福』の日に亡くなる。

『祝福』の主人公である祥林嫂の人物像の成立過程について、周作人が次のように述べている。

「祥林嫂という物語は多くの要素から組み合わさったものである。」「彼女は、魯迅のある遠縁の伯母である…」「彼女の亭主は秀才であったが、死去した後一人の息子を残した。息子は同じく三味書屋で学んだことがあり、とても聡明であったが、しかし、その後『和房』で事務をするようになったので、そこで長く住み着き、あまり家に帰らなくなった。彼女はとても心配して、息子を失ったと思っていた。…(中略)…彼女は、民国初年によく彼女の背丈よりも高い竹竿をついて魯老太太のところを訪ねに行き、悲惨で不安そうな表情で自分の苦しみを訴えた。」「彼女のその言い古された言葉を何回も話していたので、しだいにみんな信じているようで信じておらず、コメントを出すのを恐れて、ただウン、ウンと聞いているだけだった。彼女は息子を失った為、悲しんで、少し頭がおかしくなった。」「祥林嫂の悲劇は女性の再婚の問題にある。しかし、精神的な異変を起し



た原因は、やはり阿毛が狼に食べられたことにある。つまり、息子を失った悲しみという点にある。この点においては、二人はある程度共通していると言えるであろう。」<sup>14)</sup>

周作人は、『祝福』の主人公である祥林嫂の人物像が魯迅の遠い親戚であることと説明していた。『現代日本小説集』の内19篇を周作人が翻訳し、主編していた為、魯迅訳『峡谷の夜』の内容を当然熟知していよう。

ここでは、先に、江口渙『峡谷の夜』と魯迅『祝福』両作品の比較文学的検討を意義あるものにするため、両作品の女性と子どもの人物形象のモチーフをみておくこととする。

### (3) 『祝福』と『峡谷の夜』の女性と子どもの人物形象

#### (a) 女性像

江口渙『峡谷の夜』の主人公であるお仙と魯迅『祝福』の主人公である祥林嫂の人物設定をみてみよう。

#### 『峡谷の夜』

語り手の「私」は、10数年前、中学校5年生の男の子であった。夏休みを過ごすため故里へ戻る途中、発狂したお仙を目撃したことが語られている。お仙は、自分の妊娠時亭主に浮気されたことを我慢して、生れた男の子に命を繋いで生きようと決心したが、ところが、生後2ヶ月未満の赤ん坊が栄養失調のため7日前に亡くなった。「その結果あわれなお仙は葬式のあった晩から、俄にすっかり発狂してしまった」「蒼白く骨張った頬には刻み込んだような鋭い笑いを浮かべた…(中略)…」といった「狂人」の女性像が描かれている。

#### 『祝福』

語り手の「私」は、ある年末に故里の魯鎮に戻り、暫く魯四老爺の屋敷に泊めてもらう。魯鎮の人々は年に一度の祭事である『祝福』の準備で忙しくしていた。しかし町で出くわした祥林嫂は、「五年前半白であった髪が、いまは真っ白になって、とても四十前後には見えない。痩せこけ、黒ずんで血の気の失せた顔は、以前の悲哀の表情さえ消えてしまい、まるで木彫りの面のようにだった。ときどき、ぐると動く眼玉だけが、わずかに彼女が生き物であるこ

とを語っている。」と魂が抜けている女性像が描かれている。

両作品の主人公が子どもを亡くしたことによって、精神的な支えを失い、「刻み込んだような鋭い笑いを浮かべた。(浮着雕刻一般的鋒利的笑)」(魯迅訳『峡谷の夜』)と「まるで木彫りの面のように。((神色) 仿佛是木刻似的)」(魯迅作『祝福』)のように、笑い方と顔の表情こそ異なるが、どれも段々と「狂人」の女と変化していく姿が描かれている。

## (b) 子ども像

### 『峡谷の夜』

お仙は、子どもの初七日の夜に、家の牢屋から抜け出して、墓場で埋葬された子どもの棺桶の蓋を壊して、子どもを掘り起こして、その死体を木の上から、「私」の首のほうへ投げたこと、「やがて女は子供をあやしてでもするらしく、暫時左手に抱えた何かを揺す振っては、唄ともつかない叫を細く続けていたが、とうとう何時の間にか抱えたものに深く顔を押しあてて、声に出るまでさめざめと泣き始めた。」という描写である。

### 『祝福』

祥林嫂は、再び魯四老爺の家で働くようにはなったが、人に会うと、「私は本当にばかだった」に続き、狼に内臓を食べられて亡くなった子どもの「阿毛」のことを繰り返して話し、そしてさらに、小さな子どもを見かけると、「ああ、うちの阿毛が生きておれば、これぐらいになるんだが」と言い、精神状態の異常を描いたり、心の中から一刻も亡くなった子どものことが離れることはなく、心の中でずっと成長し続けていることが描かれていた。

以上のように、両作品には、「狂人」の女の亡くなった子どもに対する描写の共通点も見られる。

さらに、両作品には、夫に頼れなくなり、子どもに全てを託したことに対する描写も共通点が見られる。たとえば、『峡谷の夜』のお仙は、「亭主は子どもの生れる前後から、結婚以前に往来していたこの村の女と、再びいろいろな噂を立てられ始めた。而かもそれが産褥にいるお仙の耳に屢々繰り返されて入ったのである。…その裡にお仙は凡ての事を擲って、生れた子ども一人に命を繫

いで生きようと仕始めたらしい。」お仙は、懐妊中、夫が元彼女と浮気をして  
いたことを知りながらも我慢して、子どもさえ居れば、夫は気持ちが自分の方  
へ向いてくれるだろうし、また子どもさえ居れば生きる力と目標が出てくると  
考えていたのであろう。一方、『祝福』の祥林嫂は、「あんなに丈夫だった亭主  
が、あの若さで、まさかチフスにかかって死ぬなんて誰にわかりましょう。…  
(中略) …それでも、息子がおりますし、この祥林嫂は働き者で、柴刈り、茶  
摘み、養蚕、なんでもできます。だから、なんとか暮していけるはずでした。  
ところがなんと、こんどは息子が狼に食われちゃったんでさ。」

「凡ての事を擲って、生れた子ども一人に命を繋いで生きよう」（江口渙作・  
魯迅訳『峡谷の夜』）と「息子がおりますし、…（中略）…なんとか暮してい  
けるはずでした」（魯迅作『祝福』）と表現されるように、夫が別の女性に気が移  
り、精神的に「寡婦」となったお仙（江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』）と、夫が死  
去し寡婦となった祥林嫂（魯迅作『祝福』）の、子どもは寡婦として生きて行く  
ための唯一の命の綱であるという描写に、筆者は表現の共通点を見出すのであ  
る。

### (c) その他の描写における共通点

両作品の主人公の嫁ぎ先について、江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』には、  
「お仙は山間の孤駅とでも云ふ可きこの村の而かも小さな駄菓子屋の女房であ  
る。二年程前ここから三里ほどある川の町から嫁に来たのである」と描かれて  
いる。一方、魯迅作『祝福』には、「口入れ屋が衛家山の者」「あの姑は…（中  
略）…」（祥林嫂を）山奥のほうに嫁がせてることにしたのでさ。」と描かれて  
いる。

「山間の孤駅」（江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』）と「口入れ屋が衛家山の者」  
「山奥のほうに嫁がせてることにしたのでさ」（魯迅作『祝福』）と表現されるよ  
うに、外の社会と隔離されている環境の中で、女性が孤立無援の状況に置かれ  
ていることにも、筆者は表現の共通点があると考えている。

このように、江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』と魯迅『祝福』には、重ね合わ  
せてみても一致する表現が数箇所存在することが確認できる。

勿論、江口渙の『峽谷の夜』の中で、人道主義的手法で表現するお仙という女性像や2ヶ月未満で亡くなった嬰兒の子ども像と、魯迅の『祝福』で表現する祥林嫂という女性像や阿毛という子ども像は本質的に違う、と筆者は考えている。それは、江口渙の早期作品は、白樺派の影響を受けていたと言っても過言ではないからである。一方、魯迅『祝福』の祥林嫂は、中国の礼教に縛られた女性の悲惨さの描写が作品の趣旨であると考えられよう。だが、上記に示したように、江口渙作・魯迅訳『峽谷の夜』のお仙という女性像が、魯迅『祝福』の女性像祥林嫂に投影し、そして『峽谷の夜』で描かれた生後2ヶ月未満で亡くなった子どもが、『祝福』の子どもの阿毛に投影したと看取することは可能だと筆者は考える。

最後に、筆者は魯迅の論述に言及しながら、もう一度詳しく、魯迅が江口渙『峽谷の夜』の翻訳を通して、江口渙という人物を知り、彼の人道主義的な思想に共感を寄せていたことを検証してみよう。

### 三 魯迅『祝福』と江口渙『峽谷の夜』で表現する人道主義

#### (1) 魯迅『祝福』の子どもの形象

魯迅は「女にかんして」<sup>15)</sup>では、「この社会制度は女をさまざまな奴隷としてこねあげたうえ、さまざまな罪名を頭上にくわえるのだ。」「私有制度の社会では女を私有財産とし、商品とした。すべての国家、すべての宗教には多くの奇妙不可思議な規則があるもので、女を不吉な動物とみなし、威嚇し、奴隷のように服従させる。同時に、上層階級の玩具にするのである。」「男が私有財産の主人であるかぎり、女自身は男の所有品でしかない。」と論じ、女性が人間として扱われていない現状に対して、中国の社会を痛烈に批判した。

そして、「燈下漫筆」<sup>16)</sup>では、「かくて大小無数の人肉の宴席が、文明始まって以来現在まで張りつづけられ、人にはこの宴会場で人を食ひ、人に食われ、殺人者の愚妄なる歓呼の声に、悲惨な弱者の泣き叫ぶ声はかき消された。女や子供の声などももの数ではない」と、文明が始まって以来ずっと続けてきた弱肉強食の現象の中で、特に社会的な弱者である女性や子どもは一番の犠牲者となり、助けを求める叫び声でさえも消されてしまうことが述べられている。

また、魯迅と乳母の長媽媽に関して、よく知られた次のような記述がある。

「私の乳母、長媽媽すなわち阿長がこの世を辞してから、おおよそ30年になる。私はついに彼女の姓名、彼女の経歴を知ることなく、養子が一人いたのを知っているばかりである。彼女はたぶん若くして夫に先立たれた寡婦だったのだろう。」<sup>17)</sup>

魯迅は、寡婦長媽媽を念頭に、『祝福』では、「四叔が眉をしかめたのを見て、寡婦であるのが気に入らないのだと妻の四嬸にはわかった」という描写を施し、祥林嫂が二人の夫に先立たれ、礼教の犠牲者であることを読者に伝えていた。

また、社会的な弱者としての子どもに関して、魯迅自身も幼い四弟と妹を亡くしていた。

その思い出として、『酒樓にて』の中で、「私」は、同級生かつ同僚であった呂緯甫と午後から夕方までかけて、酒を飲みながら、呂緯甫が亡くなった弟について、次のように語っている。「ぼくには弟が一人いてね。そいつは三歳のときに死んで、ここの田舎に葬ってある。僕はその顔もよくおぼえていないが、母の話では、たいへんかわいい子で、僕によくついていたそう。母は、いまでもこの子の話をしては、涙をこぼしそうになる。」<sup>18)</sup>

それについて周作人は、『酒樓にて』という作品の中で描かれた呂緯甫の二つの出来事は、いずれも作者自身のものである<sup>19)</sup>と説明している。そのうちの一つは、魯迅の幼い頃亡くなった弟を指している。

魯迅の夭折した弟について、周作人は、「ここで幼い弟のことについて話したい。それは著者の四番目の弟であり、…(中略)…清の光緒癸巳(1893年)6月13日に生まれ、戊戌(1898年)11月8日に亡くなったので、六歳だったはず。作品(『酒樓にて』を指す——筆者)では三歳としていたが、…(中略)…定かではないが、あるいはわざと夭折した妹とを組み合わせたのであろう。妹の幼名は瑞、光緒丁亥(1887年)に生れた。月日は覚えていないが、たぶん一歳未満だったであろう。天然痘だった。」<sup>20)</sup>と述べている。

筆者は、魯迅が夭折した弟、妹のことを忘れることができず、また、自分の母親が当時幼児を失った悲しみがどれ位深かったかを『祝福』の祥林嫂の二歳

の子どもを失った悲しみを通じて思いを寄せたともいえるのであろうと考え、その為、『峡谷の夜』の子どもを失ったお仙の描写に共鳴共感を寄せ、その作品を翻訳し、のち、『祝福』に子どもを失った祥林嫂の形象の創作に投影されたと考えている。

## (2) 江口渙『峡谷の夜』

前述一(1)でも紹介したように、江口渙は『続わが文学半生記』(春陽堂書店、1958年)の中で、「たまたま、大正9年(1920)7月9日に、母が栃木県鳥山町の屋敷町のこの家で死んだ」「…社会主義者の名前をつらねた勧誘状が送られてきた」「『こんど結成される日本社会主義同盟に加盟せよ』というものである」「その当時の私には、社会主義の理論などほとんどなかったのだ」と記述している。『峡谷の夜』の創作は、江口渙が日本社会主義同盟に参加される二年前の1918年11月の作品であることにも注目したい。

そこで、1920年頃当初の社会状況と人道主義の状況を示しておこう。

1910年から1919年は、白樺派の勃興期であり、武者小路実篤は、「白樺の運動は、自然の意志、人類の意志を尊重して、個人がいかに生きるべきかを探究する運動なのである。このことを自覚している人は少ないかも知れないが、白樺の人が何よりも実感を重んじ、真心や、真実を愛し、嘘を嫌ったのはそのためである。」<sup>21)</sup>と、その時期は、「個人がいかに生きるべきか」「真実を愛し」て創作する時期であったと説明している。

さらに、「雑誌「白樺」は明治43年(1910)4月号をもって創刊され、大正12年(1923)9月をもって終刊されている。この十余年間は、近代日本文学の最も多彩な時期で、文学時代としては、自然主義文学の爛熟から凋落期に始まり、左翼文学の台頭期に終わっている。「白樺」はいわばこの二つの文学流派の中間に現れ、その系統を繋ぐ代表的な流派である。」<sup>22)</sup>と、「白樺」派は自然主義文学凋落期から、左翼文学の台頭期までに現れたという記述があり、1920年代前後には、自然主義文学から白樺派へ、そして左翼文学へ変遷したと説明している。

本稿には言及しなかったが、江口渙自身は、ロシア革命に感銘を受けていた

という記述がある。だが、『峡谷の夜』には、「実感を重んじ、真心や、真実を愛し」というような、ありのまま、淡々と出来事を語っている創作作風が、白樺派の影響を受けていると考えられよう。そして、筆者は、魯迅がその作品を選んだ一因がそれにあるとみている。さらに説明すると、『現代日本小説集』において、魯迅が翻訳した11篇の作品の中で、有島武郎（1878.3-1923.6）の作品が二篇収録され、その一つは、『小さき者へ』である。有島武郎は、その作品の中で、「お前たちは去年一人の、たった一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪われてしまったのだ。お前たちの人生はそこで既に暗い。」「大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその刹那に忽如として現われ出たのだ。その時新たな母は私を見て弱々しくほほえんだ。私はそれを見ると何んという事なしに涙が眼がじらに滲み出て来た。」<sup>23)</sup>と、幼い子どもが母親を失ってしまうという現在と将来の寂しさや母親となる女性の偉大さを感動する瞬間を表現している。

魯迅は、有島武郎という「白樺」派作家に感銘を寄せて、『現代日本小説集』の作家紹介の中で、「…（前略）…1910年ごろ、雑誌『白樺』が創刊されると有島も同誌に寄稿し、しだいにその名を知られるようになった」と述べ、そして、『小さき者へ』について、「有島は白樺派であり、一個の覚醒者だ。だからこそ、こうした言葉もあるのだが、…（後略）…」<sup>24)</sup>と『小さき者へ』の中の言葉を列挙しながら評価していた。

江口渙は、『白樺』の人たちの結びつきは、もちろん学習院出身という身分関係が基本ではある。だが、同時に、反自然主義的にして、人道主義的である、という文学的傾向も一つの条件だった。」<sup>25)</sup>と述べたことから、江口渙は人道主義的な観点をもって、虐げられる女性や子どもを主題とした『峡谷の夜』（『三田文學』1918年12月号）を創作した。魯迅はそれに共感を寄せて、『現代日本小説集』（1923年6月）の一作として翻訳し、そして、約一年後に創作した『祝福』（1924年2月）には、江口渙『峡谷の夜』の女性像と子ども像が投影されたと筆者は考えている。

その他、『峡谷の夜』が創作された頃の江口渙作品の風格について、宇野浩二は次のような記述がある。「この『星座』は江口渙が編輯していた。」「江口

は、明治の末年頃に、『新小説』などに、極端な謂わゆる美文調の文章で、釣り合うような小説を書き、大正の初め頃に、「スバル」その他に、同じような傾向の小説を幾つか発表しているから、そういう小説を読んだ記憶から、いつとなく、江口の名を覚えたのかも知れない。」<sup>26)</sup>宇野浩二がいう「極端な謂わゆる美文調の文章で、釣り合うような小説を書き」とは、『峡谷の夜』の中で、「眉に迫っている聳える連山の肩から覗く二十日頃の月が、到る処に水のような光を落していた。曇みかけて幾重にも押し並んだ山々の壁が藍ともつかず、黒ともつかない濃い色を染めて、空へ空へといくつも竣しく走っている」<sup>27)</sup>のように、随所美文調のタッチで、峡谷の夜の景色が描かれて、「藍」「黒」など色調の使い方及び「月」や果てしない大自然の空間の表現は、寂しさを感じ取れることもできよう。

さらに、『峡谷の夜』には、次のように「狂人」が弱い女性から、強い女性へと変っていくことが描かれている。「そして獣のような底力のある呻き声を発しながら無闇矢鱈と泥を掴んでなげつけた。而かも何故かこんどは少しも逃げようとはしない」「そして両方の手に力を籠めて頻りに土の面を壓へながら、捕った獲物を腹の下に隠している豹のように鋭く聳した肩の間に心持首を落して、上眼使いにきよときよとと鋭くみんなを睨め廻した」(傍点は原文。)  
「その間から抑へ切れない恐怖と憎悪と忿怒とが入り乱れては溢れて来るのだ」「今まで硬く刻まれていた鋭い笑顔は、忽ち火を吐くやうな忿怒と憎悪との形に変わって恰も繋がれている猿が石を投げつけられた看客に現すやうな、怖い形相に変わって行った。」

実話を材源とし、『峡谷の夜』の一年前に創作された『児を殺す話』には、生計に苦しくて嬰兒を川に沈めて殺してしまうというような精神的に追い詰められた弱い女性が描かれているが、『峡谷の夜』のお仙は、「逃げようとはしない」「みんなを睨め廻した」「抑へ切れない恐怖と憎悪と忿怒とが入り乱れては溢れて来るのだ」「(笑顔が) 忽ち火を吐くやうな忿怒と憎悪との形に変わって」といった、反逆心を燃え立たせる女性像が描かれている。その変化は、のち、江口渙が次第にプロレタリア作家に変わっていくことが暗示されているようであった。



『江口渙自選作品集』は第1巻から第3巻までである。第1巻には、『赤い矢帆』に収録されている6篇の作品の内、「馬車屋と軍人」「顔」「蛇と雉」と「赤い矢帆」<sup>28)</sup>の四篇が収録されているが、しかし、『峡谷の夜』と『雁』の二篇は、第1巻から第3巻には収録されていなかった。そこで、『峡谷の夜』と『雁』との共通点を考察する。

『雁』（大正4年〈1915〉3月30日作、『赤い矢帆』新潮社、新進作家叢書、第17編1919年6月所収）は、「私」という小学生の男の子の、父親の妾のお瀧との心の通い合いが描かれている作品である。お瀧は20代後半の女性と設定され、しばしば「私」のことを自分の子どもであると錯覚を引き起こす悲慘な女性である。

「坊っちゃんこれから私の子になって下さらない。後生ですから」「坊っちゃん。遊したのです。あれつきり少しも来て下さらないんですね。私毎日おまちしているのに、あんまりですね」「だれが何と云ったって坊っちゃんだけはわたしのものよ」「私が悪い事をしたんですから、坊っちゃんのお父様がお怒りになったの。ほんとうに皆私が悪いんですよ…でもね、私だって可哀さうなの…」<sup>29)</sup>のように、父親の妾であるお瀧が小学生の男の子にお願いするというような女性の倒錯した心理描写が書かれている。

江口渙が『雁』の作品を『江口渙自選作品集』に収録していなかったのは、妾が本妻の子どもを自分の子どもであるように錯覚を起している精神異常な女性の描写が、「若々しいヒューマニズムが情熱的に押し出されていて」に対する「へんにちぐはぐになっている」と感じていたのではないだろうか。だが、『峡谷の夜』と同じように、妾、寡婦、子どもとの死別という女性像に対する描写は、読者に社会の弱者への同情心の喚起、社会への反抗にも繋がるものであろう。それは江口渙の作品が魯迅に評価された一面でもあると筆者が考えている。

## おわりに

江口渙は魯迅生誕80年に、『アカハタ』機関紙に、「『人間魯迅の革命精神』——生誕80年によせて」として、次のように記述している。

「私たち訪中作家団（共産党訪中作家代表団団長として——筆者）がこの7月（1961年——筆者）上海に行ったとき、魯迅の墓に花輪をささげたことはすでに書いた。…（中略）…わが小林多喜二が東京の築地警察で殺されたのが1933年2月20日である。それから2、3週間たったあとだった。武蔵野町吉祥寺の私の家に小林の死に対する魯迅の弔文が届けられた。」<sup>30)</sup>

そして、『プロレタリア文学』（第2巻 4・5月合併号第4号）にも同じ弔辞が掲載され、さらに、「その他中国左翼聯盟、および丁玲、茅盾の諸同志からも抗議文がきているが、翻訳が間に合わないので、本文は割愛した。（編集局）」<sup>31)</sup>という説明が付け加えられていた。尚、『魯迅年譜』にも、「今月（1933年2月——筆者）日本革命作家、共産党員小林多喜二を弔問した。」<sup>32)</sup>という記述がある。

このように、魯迅が『現代日本小説集』の一作として、江口渙『峡谷の夜』を翻訳して約10年が経ち、日本のプロレタリア文学の作家となった同氏に小林多喜二への弔文を送ったのであろう。

本稿は、魯迅が『祝福』の創作に、江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』の女性像と子どもの描写を投影したことを考察した。それは、1918年11月、江口渙『峡谷の夜』が発表され、1919年6月、江口渙初作品集『赤い矢帆』に収録され、1923年6月、江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』が『現代日本小説集』に出版・収録され、その翌年の1924年3月、魯迅『祝福』が発表されたこと、両作品の女性像と子どもの描写を比較しながら、魯迅が『祝福』を創作時、江口渙作・魯迅訳『峡谷の夜』から影響を受けたという結論に至ったのである。

筆者は魯迅が江口渙『峡谷の夜』を選んで、『現代日本小説集』の一篇として翻訳・出版したのは次のような意義があると考えている。

第一に、江口渙は、『峡谷の夜』（1918年11月）を書いた時期の作品を「ヒューマニズム」と感じたり、作品の未熟さを自認していた。だが、筆者はその部分こそ、魯迅が共感を寄せ、賞賛した内容であったと考えている。

第二に、魯迅の『祝福』の女性像、子どもの描写は、中国の女性が礼教の犠牲者となることや、魯迅自身が幼い四弟と妹を亡くしたことから、社会的な弱者である女性や子どもに対する同情心の喚起は、江口渙『峡谷の夜』で表現さ

れる大正人道主義と重ね合わせたものである。

第三に、『現代日本小説集』の「総序」には、編集者である止庵が次のように記述している。

「これは『現代小説叢書』と平行して翻訳された著作であり、専門的に日本の現代文学を紹介し、作者及び作品の選定は周氏兄弟がその時期日本文学史の特徴を把握していることが体現されている。」<sup>33)</sup>

つまり、魯迅は、その時代の日本文学史の特徴を把握して、白樺派の作者の作品を多く選んでいるが、まもなくの文学転換期の到来を予測し、白樺派の人道主義的な考え方をもち、かつて日本社会主義同盟のメンバーであり、プロレタリアの文学作品を創作し始めた江口渙の作品を一篇選んで翻訳し、中国の読者に紹介した。

#### 注

- 1) 周作人編選『現代日本小説集』上海商務印書館、1923年6月。本稿に用いた著作は、[止庵主編 周氏兄弟合訳文集『現代日本小説集』新星出版社、2006年1月]のものである。
- 2) 江口渙『峡谷の夜』(『赤い矢帆』新潮社、新進作家叢書、第17編1919年6月所収)。筆者は、魯迅が翻訳に使用した江口渙作『峡谷の夜』の底本は本書であるとみている。尚、「峡谷の夜」「雁」は、江口渙『赤い矢帆』に収録されている作品である。本稿では『峡谷の夜』『雁』で表記。
- 3) 藤井省三『魯迅「故郷」の風景』平凡社、1986。(9頁)
- 4) 齋藤洋太郎「江口渙と魯迅」(『民主文学』1990-01所収) 日本民主主義学会、1990。(142頁)
- 5) 魯迅『祝福』は、最初、上海『東方雑誌』半月刊21巻第6号(1924年3月25日)に発表され、後『彷徨』に収録された作品である。本稿に用いた『祝福』は、「[呐喊・彷徨]『魯迅全集』2、学習研究社、1984年第2刷]」の著書である。
- 6) 王友貴は、「この翻訳小説集(『現代日本小説集』を指す——筆者)は、魯迅・周作人兄弟が不和になる迄に出版された最後の翻訳作品であり、魯迅が日本現代小説を翻訳した主な業績となる。この翻訳小説集は魯迅の翻訳作品の中では、特別に位置づけられていて、それは『日本現代小説集』において魯迅訳の小説中に淡い、閑適、「低回婉轉」が含まれているからである。その中の文学的な趣味、文学的な主張、文学的な追求は、魯迅が酔心して翻訳された欧州「弱小国」やロシアの作品とも大いに異なる

- り、また魯迅自身の創作作品とも大いに異なっている。その中のある作品、例えば芥川龍之介、森鷗外、夏目漱石等の作品及び周作人自身の翻訳作品や周作人がその前に発表された若干の日本近現代の文学の紹介作品は、中国へこれらの作家と作品の紹介ばかりでなく、より重要なことは、これらの作品が建国前における中国新文学の風格と文学への追求が表現され、つまりその時での非常に個人的な文学の趣味であり、また実はこのような個人的なものは、ある近代的な風格を見ることができると述べた。王友貴『翻譯家魯迅』南開大學出版社、2005。(66、67頁)
- 7) 瀬沼茂樹『大正文学史』講談社、1985。(305頁)
  - 8) 注7)に同じ、(322頁)
  - 9) 江口渙『続わが文学半生記』第1版、春陽堂書店、1958。(6、7頁)
  - 10) 江口渙『児を殺す話』(『帝国文學』第23巻第11月号、1917年11月1日所収)(87-218頁)
  - 11) 江口渙「私の歩んだ途」(『多喜二・百合子研究』第2集所収)河出書房、1955。(61頁)
  - 12) 江口渙『わが文学半生記』日本図書センター、1989。(176-178頁)
  - 13) 注11)に同じ、(61頁)
  - 14) 筆者が使ったのは、[周遐寿「彷徨衍義」(三 祥林嫂)『魯迅小説裏の人物』上海出版公司、1954。(153、154頁)]の著書である。
  - 15) 「女にかんして」(『南腔北調集』『魯迅全集』6所収)、学習研究社、1985。(37、38頁)
  - 16) 「燈火漫筆『墳』」(『墳・熱風』『魯迅全集』1所収)、学習研究社、1984。(284頁)
  - 17) 「阿長と『山海経』」(『野草・朝花夕拾・故事新編』『魯迅全集』3所収)学習研究社、1986。
  - 18) 「酒楼にて」『呐喊』(『呐喊・彷徨』『魯迅全集』2所収)学習研究社、1984。(222頁)
  - 19) 注14)に同じ、「八 酒楼」(163頁)
  - 20) 注14)に同じ、「十 小兄弟」(167頁)
  - 21) 武者小路實篤「白樺」の運動」(『武者小路實篤全集』第15巻所収)、小学館、1990。(617、618頁)
  - 22) 青柳優「白樺派文學論」(編纂者 佐藤春夫、宇野浩二『大正文学作家論』所収)小学館、1943。(63頁)
  - 23) 『小さき者へ』(『有島武郎著作集』第7輯所収)叢文閣、1918。(30頁、32頁)
  - 24) 「熱風」六十三『小さき者へ』(『魯迅全集』第1巻(『墳・熱風』所収)学習研究社、1984。(445頁)

- 25) 注12)に同じ、(42頁)
- 26) 宇野浩二『文学の三十年』、日本図書センター、1995。(109頁)
- 27) 注2)に同じ、(72頁)
- 28) その四篇の作品は次の通りである。①「馬車屋と軍人」は、『星座』1917年2月号に「貴様は国賊だ」の題名で発表、のち「馬車屋と軍人」と改題、加筆し『新日本』(1918年9月号)に発表、その後日本左翼文芸家総連合編『戦争に対する戦争』(1928年刊、南宋書院)に選ばれた。／②「顔」は、『新潮』1918年8月号に掲載。／③「蛇と雉」は、『中央文学』1919年1月号に発表。／④「赤い矢帆」について、江口渙は次のように述べている。「この小説(注、「かかり船」)はあとで大正8年(1919)4月にすっかり改作し、「赤い矢帆」という題にし『中外』の5月号にのせるはずだった。だがあいにく雑誌がつぶれたために、私の最初の短編集の中に入れた。そして、この小説からとって本の題そのものをも『赤い矢帆』としたのである。」(『江口渙自選作品集』第1巻、新日本出版社、1972。482、483頁)  
尚、上記の作品に関する説明は、「[作品]『江口渙自選作品集』第1巻所収、477-484頁]を参考したものである。
- 29) 江口渙『雁』(『赤い矢帆』新潮社、新進作家叢書、第17編、1919年6月所収)
- 30) 『アカハタ』機関紙1961年9月27日、6面。鲁迅が江口渙宛ての小林多喜二の為の弔辞は次の通りである。「同志小林ノ死ヲ聞イテ 日本ト支那トノ大衆ハモトヨリ兄弟デアル。資産階級ハ大衆ヲダマシテ其ノ血デ界ヲエガイタ。又、エガキツツアル。併シ無産階級ト其ノ先駆者達ハ血デソレヲ洗ッテイル。同志小林ノ死ハ其ノ実証ノーツダ。我々ハ知ッテイル。我々ハ忘レナイ。我々ハ堅ク同志小林ノ血路ニ沿ッテ、前進シ握手スルノダ 鲁迅」
- 31) 『プロレタリア文学』(第2巻 4・5月合併号 第4号)日本プロレタリア作家同盟編輯出版部、1933年5月1日(62頁)
- 32) 復旦大学、上海大学、上海師院『鲁迅年譜』編写組『鲁迅年譜』下冊、安徽人民出版社、1979。(533頁)
- 33) 注1)に同じ、(3頁)

## 参考文献

[中文]

復旦大学、上海大学、上海師院『鲁迅年譜』編写組『鲁迅年譜』下冊、安徽人民出版社、1979年

王友貴『翻譯家鲁迅』南開大学出版社、2005年

止庵主編 周氏兄弟合訳文集『現代日本小説集』新星出版社、2006年

周遐寿『魯迅小説裏の人物』上海出版公司、1954年

[日本語]

『有島武郎著作集』第7輯、叢文閣、1918年

宇野浩二『文学の三十年』日本図書センター、1995年、第2版

江口渙『赤い矢帆』新進作家叢書、第17編、新潮社、1919年

江口渙『わが文学半生記』日本図書センター、1989年

江口渙『続わが文学半生記』春陽堂書店、1958年、第1刷

『江口渙自選作品集』第1巻、新日本出版社、1972年、初版

『江口渙自選作品集』第2巻、新日本出版社、1972年、初版

『江口渙自選作品集』第3巻、新日本出版社、1973年、初版

佐藤春夫、宇野浩二編纂『大正文学作家論』小学館、1943年

瀬沼茂樹『大正文学史』講談社、1985年

祖父江昭二「解説」『日本プロレタリア文学集』新日本出版社、1986年

藤井省三『魯迅「故郷」の風景』平凡社、1986年

『武者小路實篤全集』第15巻、小学館、1990年

『魯迅全集』1、学習研究社、1984年初版

『魯迅全集』2、学習研究社、1984年第2刷

『魯迅全集』3、学習研究社、1986年第2刷

『魯迅全集』6、学習研究社、1985年初版

参考雑誌

江口渙『児を殺す話』（『帝国文学』第23巻第11月号）1917年11月1日

江口渙『峡谷の夜』（『三田文学』1918年12月号）

江口渙「私の歩んだ途」『多喜二・百合子研究』第2集、河出書房、1955年9月

齋藤洋太郎「江口渙と魯迅」『民主文学』1990-01、日本民主主義学会、1990年

『プロレタリア文学』（第2巻 4・5月合併号 第4号）日本プロレタリア作家同盟編輯出版部、1933年5月1日

参考新聞記事

『アカハタ』機関紙1961年9月27日、6面